

末中哲夫著

山片蟠桃の研究

——「夢之代」篇——

江戸時代、天下の台所と称された大坂の町人たちの生活と学問については、従来からも、その合理性・功利性・重商主義的傾向などの特色をあげて説かれることが多かった。とくに享保以降、大坂とその近辺に作られていった、懷徳堂・含翠堂、あるいは絲漢堂といった儒学・国学・洋学の塾をはじめとする教育環境や、自らの生活のなかでの勉学から生れてきた彼らの学問と業績には、たんなる町人としての倫理観・商業観をみせているというにとどらず、ときには、近代的思惟の萌芽ともいうべきものをしめすといった、ユニークな世界観・学問観をもうかがわせるものがあったのである。たとえば、富永仲基・草間直方・橋本宗吉・山片蟠桃といった人たちの名を思い浮かべることができるであろう。そうした大坂、さらには広く上方広く上方町人のしめる歴史的位置と意義については、享保

以降にとどまらず、江戸時代におけるその経済的位置づけとともに、彼らを教育指導した学者や彼らのサークル、あるいは写本の流布から出版事情を含めての彼らの影響力とそれへの批判についての究明など、なお多くの問題が残っているといえるのである。従来の研究の批判の上になつて、さらに、史料の収集・整理にはじまる綿密な検討が期待されているのである。そうしたときに本書を手にして、近世思想史研究の一面が新しく深く切り開かれていこうとしている感が深い。

江戸時代後期の町人学者であり、早く地動説を提唱し、またすぐれた経済学者で、まれにみる博識家であった山片蟠桃（寛延元年—文政四年）については、その豊富な思想内容をまとめたものといわれる、「夢之代」での徹底した無鬼論の展開などでも早くから注目されていた。著者は、この蟠桃についての研究を第二次大戦後まもなくとりあげ、以来たえず研究対象の一つとされてきたが、昭和二十六年から二十九年にかけて、「ヒストリア」に有坂隆道氏とともに発表された、山片家所蔵史料を中心とする「山片蟠桃の研究」は、戦前戦後の蟠桃研究史上、特記すべき業績であった。さ

らにその後も研究は進められ、ついにそれらの研究の成果が集大成されたのであるが、その第一作が本書である。著者のしめされた蟠桃研究全体の編成は、「夢之代篇」「著作篇」「升屋篇」の三部に分けられ、それぞれに研究篇と資料篇とを配合し、蟠桃の内容と、その経済の基礎構造をなす部分とを明らかにしようとしてされている。そのうちの「夢之代篇」がまず刊行されたのであるが、蟠桃に関する従来の誤伝をただし、その代表作「夢之代」の流布と状況の検討に重点をおいて基礎作業を進め、とくに書誌学的考察に留意された。「夢之代」については、明治以降の刊本以外に、主に江戸の諸本（流布本）を博搜され、そのなかから、神宮文庫本二部のうちの十三冊本を底本として校訂されている。以下、各章のテーマを列記して概要を紹介すると、

研究篇 第一章 山片蟠桃正伝 第二章 「夢之代」の成立 第三章 「夢之代」の研究 第四章 「夢之代」と懷徳堂

資料篇 「夢之代」解題と全文となつている。歴大な史料と従来多くの研究とを、厳密に、かつ慎重に批判しつつ、蟠桃が、升屋の別家番頭としての経済活動

のかたわら、中山竹山・履軒に学んで、儒教的合理主義をまとめ、その上に立脚して自然科学的合理主義の体系化に進んでいった、と指摘された。著者の蟠桃研究の全貌は、第三作の完結まで待たねばならないが、「夢之代」の整備にみられるような網羅的・基礎的な作業、あるいは、厳密な史料操作による、蟠桃という人物像の全体的再構成の方法は、第二・第三作の展開に期待をいだかせるとともに、読む者それぞれに多くの考察材料を提供しているといえよう。

(A5判 本文二二二六頁 写真二〇頁 昭和四六年三月 清文堂発行 定価二二、〇〇〇円) (大月明・大阪市立大学教授)

岩村登志夫著

日本人民戦線史序説

日本人民戦線の理論的実践的諸経験を全面的に明らかにした著作は未だ無いが、その重要な足掛りが本書である。人民戦線史を問題にするうえで不可欠の日本労働運動史の研究は、研究史としての浅さ、研究者の絶対的不足、資料的制約(最近、戦前の政府官憲資料の覆刻がかなりなされてきたとはいえ)という固有の困難な条件に加え

て、それらの結果というよりもむしろ原因であるが、研究方法についての活発で持続的な議論と共通の認識が無いまま進められてきた。従って日本労働運動史あるいは日本人民戦線史が、日本近現代史の中で、科学的歴史学としての位置を充分に占めているとは言いがたいのが遺憾ながら現状である。

著者の出発点は、労働運動史に則して言えば、日本労働運動の特徴的弱点である組織率の低さと組織の分裂について、従来の研究にあった二つの傾向、即ち一方では、「弾圧と指導者の裏切りと誤謬に単純に帰す」「上部構造的」側面のみの研究と、他方で、主として労働市場の構造的分断から運動の分裂を経済決定論的に説明する研究の両者を止揚する見地であり、労働運動を「なによりも労働者大衆自体の闘争として」えがきだそうとする立場である(補論Ⅱ 日本労働運動の理論と現実)。

本書の構成は本論・補論を含めて合計八つのそれぞれ独立した論文よりなるが、いずれも戦前日本のファンズムに抗する人民の統一戦線運動、人民戦線の歴史を全面的に明らかにするうえで基礎作業である。本書の分量の半ばを占め、その「主軸」

をなす「小岩井浄論—日本人民戦線の歴史的前提とその展開過程—」は、戦前日本の最大の工業地帯であった大阪地方の労働運動が生みだした指導者小岩井浄について、彼が運動史に印した足跡を初めて全面的にかつ正当に位置づけたといえるが、読者はこの「小岩井浄論」によって、第一次大戦から第二次大戦までの日本の労働運動・農民運動・無産政党運動の大きな流れを新しい観点でつかみとることができよう。農民労働党や新労働党、そして大阪港南地方全労総同盟合同促進協議会など、二〇年代から三〇年代にかけての小岩井浄に代表される統一戦線運動の誇りうべき伝統は、たとえそれが苦悩と最終的には敗北への道程ではあっても、この時期を分裂と抗争のいわゆる「暗い谷間」として簡単にかたづけざることをはや許さない。

岩村氏の研究方法のすぐれた特徴は、日本労働運動史を国際労働運動史の不可分の一環として、かつ日本資本主義発達史との構造的運関の中で把握しようとするところにあり、それは、豊富な語学力を駆使した外国文献の利用(補論Ⅲ ソ連における日本ファンズム論の展開によせて)や、広範な聞きとり調査を含めての丹念な実証的作